竜人

無毛の白い大地を、クワーレンは見習い仲間と共に走っていた。逃げろ、逃げろ。見習い帽子をかぶった丸い頭が、いくつも前で揺れている。

ふと、足に何かが当たった。柑橘のバッサムだ。野菜も転がってくる。追いつかれた！　見習いたちは悲鳴を上げた。

「〈見えない死〉だ！」

「助けてえ！」

野菜に何度もどつかれ、見習いたちは倒れていく。クワーレンは、野菜と見習いをよけながら、必死に走った。すぐ横を、チャルーが走り抜けていく。彼は岩羊に乗っていた。

「早くしろ、さもないと死ぬぞ！　岩羊に乗れねえ意気地なしは、放っておけ！」

チャルーは、にやっと笑った。だが、次の瞬間、彼は岩羊から転げ落ちた。

ざまあみろ、クワーレンは思った。そこで、巨大な灰色の樹がやって来た。

樹は、枝の腕でチャルーを抱えて、立ち上がらせた。

樹に顔はなかったが、枝葉を揺らし、クワーレンを、きっと見上げた。

「あなたを守った。私は、あなたを守った」

樹はそんなようなことを言った。クワーレンは、「来てくれたんだね！」と叫んだ。

樹に立たされたチャルーは、また走り出した。その後ろから、怒涛のように野菜の波が押し寄せてくる。しだいに野菜は溶け、鉛色の液体が布のように広

がった。
クワーレンは、はっとした。「だめだよ！」
遅かった。波は、灰色の樹を容赦なく包みこみ、燃やしはじめた。
「早く！　まだ逃げられる！」
クワーレンは叫んだ。まるで昔からの友人のように、樹のことを思っていた。
樹は、燃えながら言った。
「あなたを守る、あなたを守る……。目をそらして……。あなたは逃げられる」
クワーレンは、顔をそむけた。そして、走った。見捨てたくはなかったが、彼は全力で走った。それが樹との約束だと思った。
しかし、途中で気持ち悪くなり、うずくまってしまった。吐き気がこみ上げる。灰色の樹は、鉛色の波を押し留めているようだ。だが、それもいつまで持つだろう。
前方から、誰かが駆けてきた。案山子（かかし）のようにひょろ長い体に、泡だてたようなくせ毛が跳ねている。……あれは……。
「……ピクランタ……」
「〈見えない死〉だぞ！　ナッシュ！」ピクランタは叫んだ。
「ピクランタ……」
自分の後ろに、何者かがいる。振り返らなくてもわかる。ぞっとするほど冷たい深淵のようなものがいる。
しかし、あまりの悪寒で、ピクランタにはその存在を知らせることができなかった。言葉はのどに詰まり、やがてクワーレンは、鉛色の液を吐き出した。

◆

学舎へ向かう馬便に揺られながら、クワーレンは夢の情景と現実を行ったり来たりした。

クワーレンの隣には、イムサより無口なフデウという少年が、腕を組んで居眠りをしている。見習い帽子からはみ出た直毛は藁みたいで、目や頬、首の周りを荒々しく隠していた。時折、口の下にできた赤いできものを引っ掻く以外には、動きを見せない。

イムサとマウリン、その前に、エネーリスとリリが座り、宿題の話をしている。マウリンは、そもそも宿題があったことすら忘れていたようだ。

「なにが出てたっけ！」前の座席をつかんで、マウリンは悲鳴を上げた。

「古典の『五山脈物語』の一部を書き取りよ。アマキン師の授業だから、一時限目」とエネーリスは振り返る。

「ふうむ、間に合わないな。ヤールメに頼んでみよう！」

ヤールメは、速筆を得意とする隣の教室の少女だった。リリが呆れたため息をつく。

「なに？　適材適所っていうでしょ！」マウリンは言った。

「ヤールメは適所とは思わないだろうよ」イムサがぼそり言った。

クワーレンの後方では、もう一つの騒ぎが起こっていた。チャルー、ガルシュ、トルーヤの三人組が、『いっさいがっさい』で仕入れた新しい一発芸を披露しているのだ。

クワーレンは、ぼんやり外を眺めた。空は眩しいほどの青一色で、太陽の季節が来ることを知らせている。クワーレンの心の天気は、それとは正反対だった。自分が置いてけぼりを食らっているのは面白くない。何もない空は、彼の

目にうら悲しく映った。

〈見えない死〉が北熊学舎（ノール）で起こってから、三日が経っていた。見習いたちは、〈見えない死〉が近くまで来たことに興奮し、事件を知らなかった子たちに、まるで自慢話のように話した。でも、大抵それをするのは、〈見えない死〉を見なかった子たちで、実際に見た子たちは、口をつぐんで小さく身震いした。

植物学のレイ師は、自分が手入れをした畑で〈見えない死〉が起こったことと、それが原因で多くの見習いが体調を悪くしたことを受け、衝撃のあまり休んでいた。

だが、変化があるのはそれだけで、学舎生活は普段通りに続いていた。

学舎に着き、朝食を食べ、一時限目が行われる。マウリンは、ヤールメに頼んで宿題をやってもらったが、筆跡が違う、とアマキン師にばれて、ねばねばとした説教をくらった。

「宿題は約束です。約束を守らなければ、信頼を得ることができません。そんな生涯を、あなたは送りたいのですか？」

アマキン師はみんなの前でそう言ったが、クワーレンは大げさなアマキン師の話をほとんど聞いていなかった。彼は、教科書の端っこに雲を一つ描き、話が終わるまで輪郭線を何度もなぞった。

次の日も、次の日も、学舎はいつも通りの様子を見せた。星読み学のマーゼン師は、普段のかたい声で、淡々と星座の動きについて話した。

「大顎座は、東から出て西へ沈んでいく。この動きは、どの星にも言えることです。大顎座は、今の時期では早朝、東の地平線に現れます。見つけ方は比較的簡単です。空の中心星『〈天守り（グロナーシュ）〉の心臓』から、見かけで親指と人差し指を広げた先に、大顎座の鼻づらが見つかります」

誰も、〈見えない死〉のことを語ろうとしなかった。もしかすると、あれは夢

だったのでは。そう思うほど、師の人たちは平然としていた。いっそのこと、何かとんでもない騒ぎが起きたらいい。クワーレンとしては、そっちのほうが都合がよかった。自分の問題がまぎれるからだ。

しかし、クワーレンの願いとは裏腹に、〈見えない死〉の騒ぎは、なりを潜めていった。

一週間後の昼休み。クワーレンは図書館へ行った。いまとなってはここが隠れ家だ。図書館の静寂は、すっかり自分を消してくれる。

二階を散策していると、『イリキーライの魔法動物ほのぼの日記』を見つけた。ところうとしたが、やはり背が足りない。

ミニュメを思い出す。彼女はいまも学舎に来ていないが、どこで何をしているのだろう？　魚を床に散らかしているだろうか。森に逃げているだろうか。

反対の本棚で『一年からのおもしろ魔法動物入門』というものを見つけた。絵は古いが、〈つむじ風（ザガンロフー）〉が載っていた。村回りの時、獣の村の宿でイムサと見た魔法動物だ。本物よりも可愛らしくなっている。クワーレンは、貸し出し手続きのため、階下へ戻った。

そのとき、真ん中の時計塔が鳴った。はじめて鳴るところを見たので、クワーレンは急いで近くへ向かった。

時計塔の周りには、閲覧席が並んでいる。その間を縫うように進みながら、クワーレンは時計塔を眺めた。二十五本ある笛は、なめらかに動く指のように、出たり引っ込んだりを繰り返す。二十五番目の笛は、時折しか顔を出さなかったが、クワーレンは、その音が一番気に入った。空高い星空を思わせる音なの

だ。

演奏が終わり、受付へ行こうとしたそのとき、奥の閲覧席に、灰色髪の子が座っていることに気がついた。机に伏せるようにして本を読んでいる。髪に隠れて顔は見えないが、間違いなくミニュメだった。見習い帽子をその辺に放って、絡まった髪をさらに指に絡ませている。

彼女は、今朝も馬便に乗ってきていなかった。徒歩で来たのだろうか。ともかくクワーレンは、彼女に嫉妬した。なぜミニュメだけが、猫のように過ごすことを許されているのだろう。

「ねえ、おい」

声をかけると、ミニュメは顔を上げた。目の上に、赤い引っかき傷がある。辛辣な言葉をかけようとしたクワーレンは、思わず「わ、どうしたの、それ」と言った。

「……うーんと、引っかかっちゃたの、森で。張り出した枝は危険なんだよ」

ミニュメの声は、かさついていた。一度咳払いし、つばを飲み込む。

「森に行ったことある？　危険なんだから。けど、すごく素敵なところに変わりない。あんた、森は好き？」

今度の声は、はっきりしていた。クワーレンは、彼女の肌が埃ぽいこと、加えて、土色の瞳がやけに澄んでいることを知った。

「……さあね。魚釣りには行ったよ。のこぎり魚（ザクーワナ）を捕りに行ったんだ。失敗したけど」

「あんなの、泳がしておけばいいんだよ。それよりも、西の方がずっと綺麗」

「何が？」

「景色。もっと奥に行くと、誰もいなくなる。シルレイヤの森って言うんだ」

クワーレンは、ひやっとした。前にトルーヤが言っていた、喋る木がある森

だ。
「そんなところ、入るわけないだろ」
「そうなの？　好きかと思ったけど」ミニュメは肩をすくめる。
僕のなにがわかる、という気持ちと、たしかに興味はある、という気持ちがクワーレンの中で混ざりあった。
「シルレイヤの森になにかあるの？」
クワーレンは好奇心を抑えて訊ねた。しかし、ミニュメは馬鹿にしたように笑った。
「それは自分で行かないと。でも、あたしがいいとこって言ってんだから、いいとこだよ」彼女は読んでいた本を閉じた。「行くなら、持ち物は少ない方がいいよ。こういうことになるからね」ミニュメは、目の上の傷に触れた。
「枝に刺されるってこと？」
ミニュメは、一瞬迷いを見せた。
「ええと。まあ、そう。とにかく、武器になるものは持っていっちゃだめ。両手は開けておくこと。これは約束」
「だれとの？」
「シルレイヤ。それと、森を守ってるやつ。変なものを持ち込むと、そいつに食われるよ」
そこで、中庭から鐘の音が聞こえた。予鈴だ。
「まずい！」
駆け出したクワーレンは、一度、ミニュメを振り返った。ミニュメは、いやいやと手を振った。
「授業？　出ないよ、あたしは」
クワーレンは唸って立ち去り、貸し出しの処理をしてもらった。中庭を全速

力で突っ切る。太陽は草木をくっきりと照らし出し、雲が天高くそびえたつ。
クワーレンはふと、自分が愚か者に思えてきた。雲や木、光やミニュメはのんびりと生きて、自分は汗だくになりながら、ギュグリンブ師の外国語の授業に間に合うかどうか、明日の日の目を見られるかどうかを気にしている。
馬鹿一直線なのは、果たしてどちらなのだろうか。

ギュグリンブ師の授業にはなんとか間に合ったが、師は授業の終わり際に、こう言った。
「３０１５番地の見習いは全員、教室に残ること」
教室の仲間たちは、ぎょっとして指名された彼らを見つめ、クワーレンたちも、驚きで声が出なかった。
終業の鐘が鳴り、見習いたちが完全に教室を出ていくと、ギュグリンブ師は咳ばらいをした。
「見習い生活はどうですか、みなさん」
師の鼻筋は艶があったが、石のように硬そうだった。包丁の峰みたいだ。クワーレンは、蛇に睨まれた蛙の気分だった。何も咎められるようなことはしてないはずだが、ギュグリンブ師は、いつも恐ろしい。
「すごくいいものです」恐れ知らずな優等生エネーリスが、明るく答える。
「あたしも！」マウリンも頷く。
「では、期末試験のほうも、順調にとりかかれそうですね」
「はい」
これには、エネーリスしか前向きに答えられなかった。他は目を泳がせるか、

口を閉じた。
「……まあ、そんなあなたたちに、話しておきたいことがあります」
ギュグリンブ師は、指を顔の前で組んだ。
「まず、あなたたちの村回りを率いたドナウトという師の人が、村回りを途中放棄したことを、同じ師の人として謝罪します。無事、よくここまで来られました。リトゥアーラ師には、感謝しないといけません。それと、もう一つ。続きの村回りの引率を、師の人リトゥアーラから提案されていますが、それにあなたたちは同意したのですか？」
クワーレンたちは顔を見合わせた。どうやらお説教ではないらしい。
「はい、そうです」今度はイムサが、いささか冷静に答えた。
「彼女によれば、半年後にはなると」ギュグリンブ師は片眉を上げる。
「ええ。俺たちが、それでもいいと言ったんです」
ギュグリンブ師は、イムサを、つっと見据えた。
「実のところ、北熊（ノール）学舎には、村回り引率資格のある師の人が大勢いるんです。その師の人と村まわりを休みの日にやってしまえば、早く済む……」
「嫌です！」
咄嗟にマウリンが叫び、慌てて口をつぐんだ。ギュグリンブ師が鋭い目で見つめる。マウリンは、怖気づいたが、負けなかった。
「ええと……リトゥアーラ師は素敵なアベドだから、絶対あのアベドがいいの、違う、あのアベドにやってもらいたいの！　……です」
「よかったわ、敬語を使ってくれて。本来なら、村回りを終えていないあなたたちは、学舎へ入る資格がないんです。けれど、事情が事情ですし、できれば他の見習いと出発点をそろえるべく、村回りを早く済ませておくべきだと思ったんですが……。あなたたちが信頼のおけるアベドがいいと言うのなら、リト

ウアーラに任せましょう」
ギュグリンブ師は、一言一言強く、はきはきと喋った。認めはしたけど、本当は納得していないのが、言葉で感じられた。
「その代わり、下手な真似は一切しないこと。もし、校則を破ったり、授業中騒いだり、成績に問題が見られるようなら、即刻、最初から村回りをさせますからね。北熊学舎（ノール）の師の人を引率者として」
「なっ！　それはどういうことですか！」
一番に反応したのはイムサだった。彼は怒りで耳を真っ赤にした。「村回りと授業態度やなんかは、関係ないでしょう！」
「黙りなさい！」
ぴしっとギュグリンブ師の声が飛んだ。
「村回りは、見習いとなるために必要な義務です。いくらまともな状況でなかったとはいえ、それを果たしていないあなたたちは、見習いとは言えないのですよ！　ここにいるのは、幾人かの師の人のおかげなのですからね。礼儀をわきまえ、しっかり授業に取り組むこと。いいですねっ」
ギュグリンブ師は、見習いたちが頷くまで、じろりと見渡した。見習いたちは、口をつぐんで、素直に頷くしかなかった。
師は、全員が分かったことを確認すると、「行ってよろしい」と、手を振って退出を促した。

「あのアベド、つけあがってくると思ってるんだ」食堂へ向かいながら、チャルーが言った。

「何でも許され、受け入れられると思ったら、大間違いよってことね」リリが言う。
「けど、あたしたちのせいじゃないよ！　あたしたちは、どっちかっていうと被害者だ！」
マウリンが言ったそのとき、チャルーが、向こうから歩いてくるトルーヤとガルシュに気づいて、手をあげた。「よお！」
「何を言われてたの？」小さなトルーヤが甲高い声で訊ねる。
ガルシュが、トルーヤを指さして言った。
「今、こいつと賭けをしてたんだ。やらかしたのは、マウリンか、チャルーかって」
「あたしじゃないよ！」
トルーヤとガルシュは、ケラケラ笑う。
「じゃあ、いったい３０１５番地のみなさんは、何をやらかしたのかな？」ガルシュは、薄い色の瞳を興味で輝かせた。
「別に何も」不機嫌なリリは、二人を睨みつけた。
「ひゃあ、料理番長は怖いですねえ」トルーヤは調子よくガルシュの後ろに隠れる。
「なあ、何で怒られたんだよ？　教えてくれよ」ガルシュは詰め寄った。
３０１５番地のほとんどの者は、この問いに答えてはいけないことが分かっていた。イムサとの沈黙の誓いがあるからだ。彼らは、穏便に受け流そうとした。
しかし、チャルーは違った。
「俺たち、ちゃんと村回りを終わらせてないんだぜ！」
「ああ、馬鹿チャルー！」マウリンは彼をどついた。

イムサは、すたすたと食堂へ消えた。
「なに、なんかまずいことなの？」ガルシュは困惑してイムサを見た。
「ああ！　それで、それで、怒られたんだね！」とトルーヤ。彼は、秘密を知った喜びで鼻を鳴らした。
「あんたが最後まで責任取りなさいよね。あたし、知らないから」
リリはチャルーをつつき、食堂へ向かった。「信じらんないよ！」マウリンが去り際にそう呟く。
クワーレンも、背を向け、その場を後にした。
チャルーがその後、二人に何をどう喋ったかは、分からない。

◆

週末。クワーレンは静かな朝を迎えた。部屋には自分一人だけだ。イムサは、オクルと村の図書館へ行った。勉強するというのは建前で、本当はペニャッツ酒販売を計画しているのを、クワーレンは知っている。調理学の授業で話していたことを、彼らは本気でやるつもりらしい。
チャルーは、ガルシュとトルーヤとともに、タテューム貝を採りに、海へ出かけた。のこぎり魚（ザクーワナ）がうまくいかなかったから、干潟で採れる貝を狙う魂胆だろう。チャルーは、クワーレンが寝ぼけ眼をこすっている間に、さっさと出ていった。
クワーレンは一階へ降りた。チャルーはむかつくが、家の中はいい匂いがする。

居間では、マウリンが、ポウを牛乳に浸して食事をしていた。
「あいつ、怒られてなかった？」
「へ？」
マウリンは、ポウを持っている手の人差し指を、ちょいちょいと振った。
「昨日のこと。チャルー、ガルシュたちに喋っちゃったじゃん。イムサ、怒ったんじゃないかと思って」
「……ああ。口も利かないって感じだった」
彼らが部屋に居合わせないようにしているのは、そのせいだろう。「うわ、最悪だね」とマウリン。
暖気を感じてふと台所を見ると、なんと、今まで沈黙していたかまどが、元気に火を宿していた。火事ではない。リリが料理をしているのだ。
クワーレンは、慌てて台所に飛び込んだ。台所は熱気があった。ときおり、リリが棒切れを入れて火を調節している。かまどの上の浅鍋では、ポウが焼かれていた。
クワーレンに気づいたリリは、気まずそうに額の汗を拭った。彼女は何も言わず、また忙しそうに料理へ戻った。
「おはよう。水を飲むならどうぞ。質問するなら少し出て行って」
エネーリスが皿を拭きながら言った。クワーレンは唖然としてホルトに水を注ぎ、一気飲みした。たくさんの疑問が顔に出ていたせいだろう、エネーリスは押すようにしてクワーレンとともに台所を出た。
「どういうこと？　かまどの試験に受かったのか？　でも、一年なのに。なんでリリは……」クワーレンは矢継ぎ早に質問した。
「リリが言うには、試験練習期間らしいの。前に夕飯の手伝いに行った３６６２番地を覚えてる？　あの番地の先輩を通して、家政学のカデナ師にお願いし

たんだって。……リリはカデナ師のお気に入りよ。あれは、師のお墨付きでやってるの」
クワーレンは、せかせか動くリリが、遠いアベドのように思えた。
「ねえ、『いっさいがっさい』で働くの、いつ？」牛乳髭をつけながら、マウリンがエネーリスに問うた。
「働くだって？」クワーレンは、今度はエネーリスに驚いた。
「お手伝いよ。掃除とか、盛り付けとか。チャルーと同じ、お小遣い稼ぎにね。一週間後には始めるの」エネーリスは控えめに言った。
牛乳を飲むマウリンが一番安心する、とクワーレンは思った。たぶん、自分と一緒で、なにもしていないからだ。
リリが、卵焼きと、豚肉の胡椒炒めを持って来た。ポウも一緒に盛ってある。
「学舎から貰ったもので作ったから、どうってことないけど」
「そう言うと、またラーリエに睨み利かされちゃうわよ」
エネーリスがリリを少し叩く。リリは苦笑し、肩をすくめた。
クワーレンは席につき、熱々のポウに手を伸ばした。立ち上る牛酪と小麦粉の香りは、天井まで届きそうだ。熱さでポウを右に左に移しながら、彼は、ちょっとずつ齧った。
「ねえ、質問していい？　リリはどこで料理を習ったの？」
クワーレンの問いに、リリの笑顔は強張った。彼女は、首を横に振った。
「クワーレン、その話は、なし。もう言わないで」
「……どうして？」
リリは顔を歪めた。
「〈育ての者〉に言われたからよ。だから言えないの。いいねっ」
クワーレンは、細かく何度も頷いた。しかし、マウリンは納得しなかった。

「えー、もうここで過ごして三か月経ってるよ？　そろそろ教えてくれてもいいじゃん！」
リリは、なにか言いかけたが、やはり首を振った。
「嫌。約束だもん。あんたには関係ない」
リリは、台所へおぼんを置き、部屋へ上がっていった。今日は出かけたほうがよさそうだ、クワーレンは思った。

部屋に戻ると、クワーレンは、肩掛け鞄に筆記具と画帳を入れた。はやくみんなに追いつかなければ。その方法は、これしかない。恐れられるシルレイヤの森へ行き、喋る木を描き、森の地図も作るのだ。
家の扉を開けると、鮮やかな日差しが目に入った。暑かったが、丘に吹く風は爽やかで、新緑のにおいがした。
クワーレンは、青の真中山（エィレスィルアトゥア）へ向かって歩きはじめた。
乾いた道をザクザク歩く自分の足音と、鞄が尻に当たる音だけが、旅の友達だった。鳥も虫も鳴いておらず、雲も空の隅っこに集まって、クワーレンを知らんぷりしている。
静寂は、一定してまとわりついた。これは夢かもしれない。歩きながら、クワーレンは考えはじめた。日の光は美しく、不気味な平穏が流れている。景色の変化は遅く、単調に映った。
ようやく、シルレイヤの森の入口にたどり着いたときには、うなじが汗ばんでいた。太陽は空の真ん中にあり、昼を伝えていた。
しかし、シルレイヤの森は、夜の澄んだ闇を大事そうに抱えていた。柱のよ

うにぼんやりと浮かんでいるのは、灰色の木々だ。アベドの頭ほどの大きな葉を風に揺らし、ざわざわと音を立てる。そうして黒暗の地に、星のような木漏れ日をちらつかせるのだった。

風は、外にいるクワーレンのもとにもやって来て、森の冷気を黒髪に吹き付けた。焦がされた肌は冷え、汗で湿った頭は凍え、勇んで入ろうとした気持ちを震えさせる。ぼんやりした夢の気持ちは、すっかり消え去った。

けれど、恐れゆえの魅惑が、シルレイヤの森にはあった。もう二度とこちら側に戻って来られないようなねっとりとした闇は、秘密を教えてくれそうだし、深い森の息吹も、クワーレンを解放してくれそうだった。

クワーレンは、糸引かれるように、シルレイヤの森へ踏み出した。

「クワーレン！」

突然の少女の声に、彼は驚いて振り返った。肩掛け鞄の紐を握りしめ、黒髪を乱して駆けてくる女の子がいる。

「エネーリス！　どうしてここに」

やってきたエネーリスは、クワーレンに答えるよりも、息を弾ませて言った。

「……一人で、校則を、破ってまで、して！　ここに来る必要、あるの？」

「校則？」身に覚えがなかった。「僕、いつ、どこで校則を破った？」

「家を出た、瞬間よ！」エネーリスは叫んだ。「……どうしてなの？　ギュグリンブ師に、言われた、ばっかりなのに！」

彼女はしばらくの間、息を整えることに専念した。

「一年生は、一人で外出しちゃいけないのよ」ようやくまともに喋れるようになると、彼女は言った。

「え、いつそんなこと言われた？」

エネーリスの大きな目は、驚きでもっと大きく見開かれた。

「村回りの一番最初の時よ！　ドナウト師が、市へ行く途中で言ったわ。学舎中に張り紙もしてあるし。見てないの？」
「……知らないや」
クワーレンは目をそらした。エネーリスの言うことすべてに、まるで覚えがない。それよりも、森へ行きたかった。
「ねえ、クワーレン、今は本当に気をつけなくちゃだめよ。私たち、下手したら入学前に戻されちゃうのよ」
「けど、あれは脅しだろう？」
「本当に戻されちゃったら、どうするつもりなの？」
クワーレンは答えられなかった。エネーリスは、彼が魅入られたようにシルレイヤの森を見つめていることに気づき、慌てた。
「ねえ、ちょっと。ここへは来ただけよね？　ここは、シルレイヤの森なのよ。勇敢な狩の人だって近づかない森よ」エネーリスはクワーレンの肘を掴んだ。
クワーレンは、困惑した。
「まず、君、どうしてついてきたの？」
エネーリスは狼狽した。息継ぎを求める魚のように、口をパクパクさせる。
「……だって、校則破りになるからよ！　あなたが一人で歩いたら、それを許した私たちにも責任が問われる。だからここまで来たのに。それに比べてあなたは……、あまりにも無責任すぎる！」
落ち着かなげに歩き回ったあげく、エネーリスは少し先の岩に座り、背を向けた。
怒りの空気は、静寂を際立たせた。
「……悪かったよ」
クワーレンはエネーリスに近づいた。ようやく事の重大さに気づいたのと、

諦めが半分半分だった。
　エネーリスは首を振った。見習い帽子から流れる黒髪が、さらさらと背中をなでる。
「いいの。私も悪かった。……私、ときどき嫌になるの。お節介な自分がね。特にマウリンと出会ってから気づいたわ。彼女、気にしない質だから、度々怒らせちゃうの。……いいと思ったことが、相手には悪いことだったりもするんだなって知った。でも、それってすごく難しい。一緒にいればなおさらよ」
　どうやら、うまくいっていないのは、自分だけではないらしい。特に、優等生のエネーリスがそう思っていることが意外だった。
「僕の部屋以外にも、問題ってあったんだね」
「そうよ。チャルーとイムサだけじゃない。私とマウリン。マウリンとリリ。リリと私。私と勉強。他にもいっぱいある。どうしたら、この世から病気の苦しみを抹殺できるのか、とかね。いまは、私とクワーレン」
「最後の問題は、もう終わりにしよう。他のことが大変そうだもん」
　彼らは苦笑した。その時、森から叫び声が上がった。二人は同時に飛びあがった。鳥の群れが飛び立ち、あたりは一時騒がしくなった。叫び声は続いた。まるで怒っているかのように荒々しい。エネーリスは耳を塞いだ。クワーレンも、体を強張らせた。
「いまの、なんだろう？」しばらくして静かになってから、クワーレンは呟いた。
「行かないほうがいい、行かないほうがいいわ」
　エネーリスは、今度こそ青ざめて頭をぶるぶる振り、後ずさりした。
　また声がした。次は悲鳴に近かった。少年と動物の咆哮がまじった不協和音は、二人の気持ちを、怯えから救済へ変えさせた。しかし、エネーリスは、ク

ワーレンの腕をつかんだ。
「ねえ、お節介なのはわかるわ。でも、これだけは聞いて。いま飛び込んでいっても、行き先は向こうの胃袋よ」
「でも、師の人や〈警備の者〉を呼ぶ前に、確かめに行かないと。呼ぶだけじゃ、結局大人たちは信じてくれないよ！」
「無理よ！　……そんな……」
「見に行くだけだ。君も、本当は気になってるんでしょ？」
本心をつかれたエネーリスは閉口した。森が、冷えた手をこちらに差し伸べる。
「……すぐに戻ってきましょ。ね？」
「そうしよう。あの子を助けたら、ギュグリンブ師も、僕らを退学どころか、飛び級させてくれるかもしれない」
クワーレンは、風のように駆けだした。エネーリスは、慌てて後を追った。
森に入ると、気温は急激に下がった。半袖の見習い服からむき出しになっている腕が寒い。空気は冷たく湿っており、濃厚な草木の匂いがした。
二人は、急斜面を四つん這いで上がり、張り出す枝に腰をかがめ、そびえる巨木を仰いだ。木の葉が、ざわざわと騒ぐ。
叫び声は定期的に聞こえた。小さくなったり、大きくなったり。
クワーレンは、この咆哮が、噂の喋る木ではないかと考えた。チャルーとガルシュが物真似をしていたが、もしこれが本物であれば、彼らはもっと声を太く、叫ぶようにやらないとだめだ。
「クワーレン？　どこまでいくの？」エネーリスが訊ねた。
「喋る木のところまでだよ。トルーヤが前に言ってたんだ。シルレイヤの森には、喋る木があるって」

「喋る木？」
二人は、一つの倒木を跨いで越えた。
「それって、この木のことでしょう？」
か細く喋っていたエネーリスは、またさらに小さく言い、近くの木を恐る恐る指さした。それは、ずっと通り過ぎていた灰色の木の一本だった。
「これ、これがシルレイヤよ。別名、森の語り部」
クワーレンはぎょっとして、あたりを見渡した。シルレイヤは、二人の見習いを囲む檻のように、そこら中にそそり立っていた。その幹は、深い森の闇で灰青色に浮かび上がり、滑らかな木肌は、迷い込んだ者を魅了させた。
「広葉常緑樹だから、シルレイヤの森はいつも真っ暗なの。ここには魔法動物もいっぱいいるって、イッリが―私の〈育ての者〉が言ってたわ。シルレイヤは、森に入ってくる魔法動物もアベドも……監視しているって」
シルレイヤに近づくクワーレンに、エネーリスは牽制の意味を込めて説明した。
しかし、クワーレンは、すべすべとして心地よさそうな幹を、そっと撫でるのだった。河川を思わせる糸のように繊細な曲線、穏やかにうねる幹模様。シルレイヤは水のように冷たく、絹のようになめらかだった。
「すごい、木じゃないみたいだ！」
「クワーレンっ、あまり触らない方が……」
「エネーリスもやってごらん！　あれ、これって……」
クワーレンは、既視感に襲われた。突然黙った彼に、エネーリスは、シルレイヤに魂を取られたのだと、ぞっとし、慌てて彼の肩を叩いた。
「クワーレン、クワーレン！」
「え、なに？　なにか思い出したんだけど……」

「いまはそういうこと、やめてよね。いつもだったら驚かないけど」
「僕、そんなぼうっとしているやつじゃないよ」
エネーリスは口をあんぐりあけて、歩き出したクワーレンを追った。
「自覚ないのね。ドナウト師の話も、校則も覚えてなかったのに」
岩を上り、斜面を滑り降り、木々の間をぬって、彼らは、何度か聞こえる叫びを頼りに、声の主を探した。叫び声は、獣の唸り声と少年の怒号が混ざったような、不思議なものだった。
「アベドの子と、怒鳴るシルレイヤの一本を考えていたんだけど、もしかしたら違うのかも。一人のような気がする」クワーレンは、鼻息荒くした。
「私は、シルレイヤの怒鳴り声だとは考えなかったけど……。つまり、何者かと子ども、じゃなくて、あの子は一人で苦しんでいるってこと?」
草を掻き分け、根っこにつまずき、枝に引っかかれながら、エネーリスは、クワーレンを必死に追った。
ついに二人は、開けた場所へと転がり出た。
空き地には、茂るシルレイヤから辛うじて落ちた木漏れ日が、点々となって宝石のようにちらついている。しかし、声の主はいなかった。まずいことに、声さえもしなくなっていた。
風がいたずらに駆け抜けていく。息を弾ませながら、二人は耳を澄ませた。何の音もしない。
クワーレンは、諦めきれなかった。救うつもりで来たのに、自分たちが迷子になるなんて、情けないにもほどがある。それに、シルレイヤの絵や地図も描けていないままだった。
手がかりを求めるように、必死に空き地を駆けまわっていると、突然、地面が消えた。

クワーレンの悲鳴に、エネーリスは、はっとして茂みに近づいた。
「クワーレン！」
草木が折れ、擦れる音が、騒々しく響く。エネーリスは、茂みの奥を見下ろしたが、雑草の湧く斜面に、クワーレンの姿はどこにもなかった。。

◆

起き上がろうと力を入れたが、クワーレンの体は悲鳴を上げて抗議した。
痛みをこらえて、今度は少しだけ起き上がる。体が重い。口の中に入った土を、唾と一緒に吐き出す。掌がひりひりする。立てた膝には、草の汁と擦り傷があった。
そこで、上からエネーリスの声が降ってきた。
「クワーレン、どこにいるの！」
見上げると、低木と葉がかぶさっていて、クワーレンを隠していた。エネーリスの姿は見えない。
「ここだよ！　大丈夫、ちょっと怪我しただけ」
クワーレンは、立ち上がって傷を確かめた。膝以外は、何ともなさそうだ。全身ぎしぎしと痛いが。
「そっちに行こうか？」声だけのエネーリスは訊ねる。
「いや、僕が戻る」
「登れるの？」
「多分、平気」

自信がなかったが、低木をつかむ前に、後ろで葉擦れの音がした。振り返ると、離れた木影に、綿毛のような頭髪のアベドを見つけた。

「ミニュメ！」

驚きで叫ぶと、ミニュメは咄嗟に駆けだした。彼女の頬に赤い点々がついているのをクワーレンは見たが、彼女は、あっという間に消えた。

「待ってよ！」

だが、クワーレンはすくみあがった。ミニュメのいたところに、まだだれかがいた。黄色の大きな目玉を光らせ、牙をむき、暗がりから現れたそいつは、四つ足で這うように歩き、体中、びっしりと紺色の鱗で包まれていた。長いぼさぼさの髪、顔の横から突き出る耳、背には、体を覆うほどの翼があり、それは不気味に上がっていった。

「クワーレン、のぼってきてる？」エネーリスが訊ねる。

クワーレンが答える前に、青い者が唸り声を発した。それは、今まで探していた、「あの子」の声だった。

「あの子」は四肢を使い、こちらへ跳躍した。

クワーレンは無我夢中で坂の低木を掴み、登った。足が滑る。青い者は飛び上り、足首を引っ掻いてきた。クワーレンは、さらに上へ逃げた。食いしばった歯から泣き声が漏れる。

青い手が靴を掴んだ。クワーレンは反射的に、反対の足で蹴りを入れた。枝が折れ、重く転がり落ちる音を最後に、青い者の姿が消えた。

騒々しい風の音が自分の息だと気づくのに、時間がかかった。見下ろすと、黒く濡れる草木があった。血だ。

殺した、自分が殺した。青い者は、死んだのだ。

心の中のクワーレンは叫んだ。助けが悪に変わった。震えが全身を駆け巡り、

斜面をのぼることすらできなかった。彼は、鼻をすすりながら横移動し、青い者が落ちたと思われる場所を避け、滑って着地した。それから、半ば這って、木陰へ隠れた。

青い者は、斜面の側で、潰れた凧のようになっていた。傾いだ大きな翼に隠れて、体はほとんど見えない。

「……クワーレン？　クワーレン！」

エネーリスの声が遠のいたり近づいたりする。クワーレンはその時、ちょうど青い翼が上下していることに気づいたところだった。彼は、驚きと安堵と恐れで、息を忘れた。

「……エ、エネーリス」

呼んだが、虫のささやきのような声しか出なかった。すると、滑り落ちる騒音がした。茂みを掻き分け、危なっかしく斜面を落ちてきたのは、エネーリスだった。クワーレンは、見習いの式の夜を思い出した。家の梁にリリたちと座っていたエネーリス。彼女はおかしなところで勇猛になる。

エネーリスは、倒れた青い者に気づかなかった。「クワーレン？　どこ？」彼女の顔は、仲間を探して血の気がなくなっていた。

クワーレンは立ち上がり、「ここだ！」と手を振った。エネーリスは駆け寄ってきたが、途中で青い者に気づき、硬直した。

「クワーレン……、これって……」

「いいから、まずこっちに！」

木の影で合流すると、彼らは小声で喚きあった。

「なにがあったのっ。膝、血が出てるじゃない！　唸り声も聞こえたし、食べられちゃったんじゃないかと……」

「こ、こ、これは、落ちた時に擦ったんだよ。あいつには、何もされてない…

…、足首を、つ、つ、掴まれたけど……」クワーレンは、震えが止まらなくなった。

「あの子って、竜人じゃない？　竜人って、私たちと同じように知能が高い種族よ。シルレイヤの言葉を訳せるから、森の翻訳者っていう名前もある」

クワーレンは、以前、イムサと図書館で見た、アベドに向かって叫ぶ竜人の絵を思い出した。

「だからなんだって言うの。あいつ、ぼ、ぼ、僕に襲いかかってきたよ」

「なにか理由があるはず。それに、これはとんでもなく稀なことよ。だって、竜人よ。絶滅したとまで言われているのよ」

エネーリスは興奮していた。木の影から顔をのぞかせ、竜人を見つめる。小さく息をする青い体は、はぐれた海の一部のようだった。

「……竜人に襲われる前に、ミニュメを見た」

クワーレンは思い出して言った。エネーリスは、はっとした。

「彼女がなにかしたってこと？」

「さあ……。とにかく、彼女は逃げちゃったんだよ。……あの子、どうする？」

「誰か呼びに行きましょう。最後の竜人かもしれないもの」

「でも、誰に？」

クワーレンは、本に描かれていた竜人狩りのアベドたちの様子を考えた。「もし相手を間違えたら、大変なことになるよ……」

そこで足音がした。彼らは口をつぐんだ。そして、竜人を木の葉で隠してやればよかったと思った。秘密は秘密のまま、自分たちのものにしておきたかったから。

やってきたアベドは、親鳥が子どもに餌をやるときと同じくらい、忙しくしていた。彼女は、竜人の体にかぶさる翼をどけ、萎びた草と二つの石を、懐か

ら取り出すと、その石で草をすり潰しはじめた。
小柄な老婆だ。もし見習い服を着ていなければそう思っただろう。
「ミニュメ……」
クワーレンは驚きで呟いた。「なにをしているんだろう？」
「掬い手草（ルロホルセ）を使ってる。止血効果があるの。血止めをしたいんだわ」
エネーリスは言うなり、影から立ち上がった。
その音は、ミニュメに警戒態勢をとらせた。彼女は飛び上がり、やってきたエネーリスを驚愕の目で見つめた。
「なに？　……あんた……」
ミニュメは、エネーリスを頭のてっぺんから足のつま先まで睨んだ。頬を泥と血まみれにしたミニュメの瞳は、らんらんと光っていた。
「エネーリスよ。北熊学舎（ノール）の一年。あなたと同じ教室。布切れはあるの？」
ミニュメは答えなかった。掬い手草（ルロホルセ）を淡々と擦り続ける。その間にエネーリスは、竜人の首元に引っ掻いたような傷があるのを見つけた。閉じられた目に、垢と泥の絡まった髪がかぶさり、体の鱗はところどころ剥がれている。翼の膜は濁っており、周辺は鉄っぽい匂いがした。
「あの木の裏に、あたしの鞄がある。中に布があるから持ってきて。水筒も」
エネーリスは、ミニュメの指示に従った。そのときだった。クワーレンが木陰から現れたのは。彼は、傷ついた足を引きずるようにしてミニュメに近づいた。
ミニュメは、ちらっと彼を認めると、作業の手を安定させた。
「僕にできることは？」
「じゃあ、これを擦って」

クワーレンが掬い手草（ルロホルセ）を擦る間、エネーリスが持ってきた革水筒の水で、ミニュメは傷口を洗い、エネーリスは布を引き裂いた。
傷口にしみたのか、竜人は叫び、尾を打った。
「大丈夫。薬草を持ってきたから」
ミニュメは語りかけた。竜人の口の端から長い歯が出ていようが、唸り声が上がろうが、彼女が身を引くことはなかった。
その時、鮮やかな黄色の目が、切り込みのように、細く開かれた。
「……だ、れ。いる」
竜人は、獣の唸りと子どもの声が混じった、独特なざらつきのある声で話した。
「クワーレンと、……ええと、エネーリス」
ミニュメが柔らかに答える。竜人の目は、しばらく宙を彷徨っていたが、クワーレンを見つけると、かっと瞼を開けた。
「……お前え！」
竜人は尾を打ち、大きく翼を広げた。しかし、傷の痛みに悶え、怒鳴りは続かなかった。
クワーレンは、さっさとミニュメに掬い手草（ルロホルセ）を渡した。ミニュメはそれを傷口にすりこみ、エネーリスから布切れを受け取って、傷口を覆った。
「こんなことをしたって、意味がない……」虚しくスェデンは呟く。
「本当にそうなら、あたしはこんなことしない」作業の手を止めず、ミニュメは言った。
スェデンは、再びクワーレンを睨んだ。「お前、何者だ？」
「僕は、北熊学舎（ノール）の見習いだよ。一年」

震えを抑えて、クワーレンはようやく言った。スェデンは、鼻にしわを寄せた。彼は、じっとクワーレンを見ていたが、疲れ果てたのか、再び目を閉じて横になった。

ミニュメは、「来て」と言い、竜人から離れた場所へ二人を導いた。

「見ての通り、彼は竜人だよ。それで、彼は竜人取りに捕まった。その罠を無理やりはがそうとして、あんなことになったの」ミニュメは、自分の首元を触って示した。

「……。竜人取りって？」クワーレンは、出血が自分のせいではないとはっきりわかってほっとしたが、蹴ったことは恨まれているな、と思いながら訊ねた。

「あそこの木にある、黒い箱みたいなやつ。木の上とか、根っこの間とか、いろんなところにある」

ミニュメは木の上を顎で示したが、竜人取りは見えなかった。うまく隠されているらしい。

「竜人の魔力に反応して、樹化魔法が出るって聞いたことがあるわ」エネーリスが自分の首に触れて言った。「魔法を受けると、皮膚が樹化するの。木みたいに硬くなって、固まるんだって。その樹化した皮膚が、木や地面に触れると……」

「ぴったりくっついて、動けなくなる」

ミニュメが、両手の指をがっちり交差させてみせた。

「スェデン、首に当たっちゃったんだ。だから、固まってくっつく前に、掻きむしって取ろうとして……」

「それで、あんなに血だらけになったのか」

「……もう平気だよ。血は止まったし」

ミニュメは首をすくめた。後悔が浮かんでいる。

「ねえ……、このこと、誰にも言わないでくれる？　竜人がここに一匹でも残ってる、てことも」
クワーレンとエネーリスは、そうしたい理由がよく分かる気がして、頷いた。
「僕、嫌われたみたいだけどね」
「アベドがいっぱい来たから、そりゃ、嫌がるよ。それと、あたしがここにいることも、だれにも言わないって約束して」ミニュメは言った。
「分かってるって」
クワーレンは答えたが、エネーリスは眉をひそめた。
「どうして？　あなた、いつも一人でここにいるの？」
「そうだよ、悪い？」
「悪いとかの問題じゃないわ。シルレイヤの森には魔法動物がたくさんいる。野生動物だっている。いつ死んでもおかしくないじゃないの！」
「そんなのどうでもいい！　あんたには関係ないじゃん」
ミニュメは吠えた。彼女は歯をむき出した。
「あんたは頭を持ってる。それで学舎に行けばいい。あたしは『なにも持ってない』を持ってる。それでどこにでも行ければいい。だから約束して。あたしの世界には口出ししないって」
エネーリスは、しばし沈黙した後、不承不承頷いた。
「……わかったわ」
ミニュメは、ようやくほっとした顔を見せた。

ミニュメが「二人を森の出口まで送る」と言ってきたとき、痛みと疲れで朦

朧とする竜人スェデンは、唸り声で返した。
疲労の原因は、傷以外にもあった。シルレイヤの声が、何重にも聞こえて、やまないのだ。
「あの子は、あの子？」
「名前をなんて？」
「クワーレン、クワーレン」
「黙っているべき？」
「話すべき？」
「止める手立てをしなければ」
「あいつがきっと、探しはじめる」
「黙っているべき？」
「話すべき？」
シルレイヤは、風も吹いていないのに、ざわざわと音を立てた。あまりの騒音に、スェデンは強く耳を塞いだ。自分がシルレイヤの声を聞ける竜人であることを呪う。最後の一匹になってしまったことを呪う。
もし仲間がいたら、冗談を交わしあえるだろうか。シルレイヤって動けねえのに物知りぶってうっせーよな、とか。アベドって間抜けなくせに気取っていてうぜえよな、とか。
それとも、馬鹿にされるだろうか。アベドの見習いと仲良くしていることについて。仲間の鱗を引きはがして売りつける種族と、魚を捕って遊んでいることについて。彼女をおぶって、森の中を飛び回ったことについて。おかげで彼女の額に傷をつくってしまったわけだが、それを仲間たちは喜ぶだろうか。
シルレイヤだけが、ありのままのスェデンを知っているが、彼らはなにも言わない。葉漏れ日で笑い、木の暗茂（くれしげ）に真実を隠し続けている。クワーレンがど

んなやつか、ということも。